

AMS MathSciNet インタビュー

数学研究の必須データベースである
MathSciNet について、お話を伺いました。



島根大学 総合理工学部
数理学科
中西 敏浩教授

数学研究を取り巻く環境

私が MathSciNet(に限らず、レビュー誌)の利用することが多いのは自分の研究内容、とくにこれから論文にしようとする結果がすでに他の研究者によってすでに発表されているかどうかを知ることである。先行研究の調査や過去に同じ結果があるかどうかのチェックは研究者には不可欠なことではあるが、新しい雑誌が続々と刊行される一方で(分野限定の専門誌やかつて数学の研究ではあまり聞かなかった国々から創刊される雑誌が急増している)、大学が購入する雑誌の減少で雑誌へのアクセスが不自由になりつつある現在、その作業はレビュー誌なしでは困難である。いくつかのキーワードで関係しそうな論文を見つけられる(論文の評価も知ることができる) **MathSciNet** などのレビュー誌の役割はますます大きくなると予想される。同じ結果がすでに存在するかどうかのチェックは自分の論文に限らず、査読を依頼された論文に対しても行っている。

MathSciNet がなぜ重要なのか

他の分野と異なり、数学の結果は永久的に 持続するからかなりの過去に遡って関連論文を調べられるのは有り難いことである。数学の分野においても流行の盛衰があり、現在研究している分野の以前のムーブ(第2次世界大戦終戦直後だったりすることがある)における研究を知りたいときがある。この目的のために、**レビュー記事に対象論文が引用している文献リストがそのまま掲載されているので、MR・CMP 番号を次々クリックしてかなり古い論文のデータに到達できるのは便利である。**他の活用方法について。教員採用人事の際に MathSciNet を重宝している。教員採用への応募者の業績評価は難しく、それが専門外の分野の研究者ならばなおさらのことである。私自身は応募者の論文のレビューを MathSciNet で調べて評価を参考にしてきた。

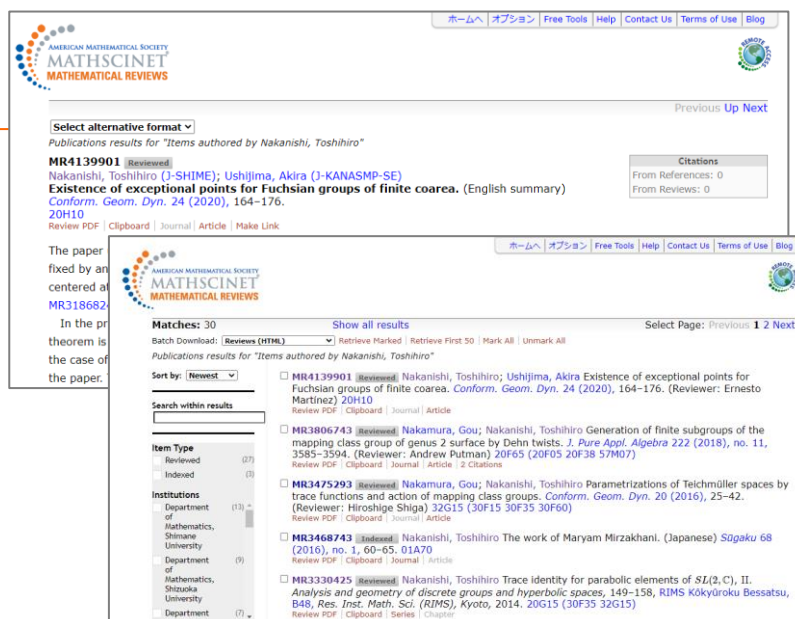
「書評文化」と MathSciNet

新刊書の書評が新聞・雑誌の重要なコーナーになっているように、数学の研究が論文の形で発表されるかぎり、そこに「書評（レビュー）文化」は必要だし、形成されるべきである。

そして、MathSciNet は、その「書評（レビュー）文化」を形成する重要な役割を担ってきた。

Google Scholar などの単なるデータベースに留まらない付加価値がある。

著者はレビューの内容に納得がいかなかったら反論したくなるであろうし、肯定的な意見を加えていきたいと思うであろう。紙の時代にはかなわなかったが電子版になったのだから、一度キリのレビューではなく Wikipedia のように修正や追記ができたり、レビューに対する反論や擁護の欄が加わることが将来の MathSciNet の形態だと想像する。悪質な掲示板にならないようコントロールする必要があり難しいとは思いますが、今後の MathSciNet にこういった新たな付加価値が加えられることを期待したい。



MathSciNet の価値

あまりにも重要過ぎてそこにあるのが当たり前過ぎて、ことさらに普段その重要性を考慮することがないほどの、いわば空気みたいなものである。いざ利用できなくなる環境になると、その重要性に気付くこととなる。

MathSciNet のご利用にあたってのお問合せは、最寄りの丸善雄松堂 営業支店または下記までご連絡をお願いいたします。新規導入に向けたトライアル等も実施しております。

(AMS, USA / 日本国内総代理店 丸善雄松堂)

M MARUZEN-YUSHODO ・掲載製品はリバースチャージ対象製品です

丸善雄松堂株式会社 【学術情報ソリューション事業部 企画開発統括部】

〒105-0022 東京都港区海岸 1-9-18 国際浜松町ビル TEL 03-6367-6114 FAX 03-6367-6184 e-mail: e-support@maruzen.co.jp